

研修医のまどい

患者さんのことなど3

その方は緑膿菌肺炎であった。

若い時はタバコを吸っており、COPDと気管支拡張症が基礎疾患にあった。朝、訪床すると、ぜいぜいいいながら寝台に腰掛けておられることがしばしばであった。

「話していると楽になるわ」

しばらく対話をしていると、たしかに落ち着くようだった。

「ありがとう」

話を聞くだけで病がよくなるなら安上がりでよいことだ。こちらだって、注射も、採血も、内服の計画もできんろくでなしなのだから、話くらいしかできんのだから、ありがたいことだ。

彼は宮大工であった。

「いままでに、そうやなあ…」

過去を思い出す彼の目は病室の中空を見る。

「大通寺の台所、竹生島の三重塔、石山寺、岩船寺なんか扱ったワ…」

「それはすごい」

「そうやなあ。ありがたいことや…」

彼の左手の親指は短く変形している。

なにか事故によるのだろうか。

「石山寺でナ、あすこに縁側とか、渡り廊下があるやろ、昼休みにそこで昼寝すんねんな」

天下の昼休みである。

私は石山寺の、木漏れ日のなかで昼寝する男たちを想像した。

それは天下一の昼寝に違いなかった。

「趣味のないもんには、しかたないけどナ…」

彼は馬場秋星の「浅井三代小谷城物語」という本（絶版のようだ）を読んでいた。

「浅井の墓には行った？」

彼はそう尋ねたが、私は残念ながらまだ参らない。

「小谷山も、いろいろ面白いんよ」

彼はさまざまな寺の話をしてくれた。

岐阜、京都、近江、奈良…彼は休みのたびに寺に詣で、家族、こどもらを観光に連れ出し、みずからは寺をじっくりと見ていたようなのだ。

「大工仕事が平日、忙しいからゆうて」

と彼は苦笑した。

「こどもらは休みの日はオトウチャンに遊びに連れて行ってもらおうと思ってるしな。家で寝てばかりいるわけにはいかへんナ。家族サービスせんとな…」

彼の緑膿菌は、抗菌薬によりだんだんとよくなった。しかし酸素の管は、外せぬままだ。

「こんなんって、なさけないなあ」

酸素がなければ彼の酸素化は確保できず、息がくるしいのだ。

在宅酸素の機械は、大きすぎるというので彼は拒絶した。

「先生…」

「なんですか」

「長命寺は行ったことがある？」

「いえ、まだ…」

「いい寺よ」

彼はそう言ってニカッと笑った。

「いっぺん行ってみ」

長命寺は近江八幡にある古刹だ。

日本第一の長命で有名な、武内宿禰ゆかりの寺なのだ。

私は母をともない、長命寺へ登った。

よく晴れていた。八百八段を登り切ると、小さな涅槃のような境外の地が待っている。

私は境内のロハ台に座り、大きな本堂をつくづく眺めた。

俗世には要求が山ほどある。

その切実な要求を「救う」寺が長命寺である。

それはつまり、俗世のどんな悩みも、仏の前においてよい寺ということだ。

仏門は超俗のものゆえ、欲から離れよなどとは言わぬお寺ということだ。

自分は、そうした古刹を、数少ないがいくつか知っている。

多くの人が、そうした寺に、かそけき切実な思いを抱えて石段を登ってくる

…。

静かな山のなかに梵鐘が低く遠く響いている。

宮大工の彼は、この本堂をどう見たのであったろうか。

休みごとに寺に参じ、祈りをささげた彼は、なおらぬ肺の病と共に生きてい

る。

やまいとはなんであろうか。

私は、短絡的には考えぬ。

私は、祈ることをあらゆる意味と段階において諦めることはない。

空谷子しるす

(2021/06/11)

患者さんのことなど4

「兄はな、学校に通っている時に汽車に乗ってたんやけどな」

「はい」

「むかしは汽車に人間が乗り切らんので、連結部にぶらさがっていた」

「はい」

「それで兄が通学のときに、連結部にぶらさがっていたら」

「はい」

「すべり落ちて、足が車輪に挟まれたんよ」

「なんと」

「親切な人がいて、兄の傷ついた脚を、履いてた足駄でてこの原理で固定して」

「はい」

「それからリヤカーに乗せて、病院に行ったんよ」

「はい」

「駅からずっと、兄の血が点々と病院までついてね」

「はい」

「私はそのころ××の女学校に通っていたから、知らせを受けて、兄は死ぬんかと思って」

「はい」

「あわてて病院に行った。当時私の家に疎開していたところが学校まで来て知らせてくれたんやけど」

「はい」

「病院に行ったら、合羽をひろげた上に兄の脚があって、血の海なんよ」

「はい」

「毎日学校が終わったら、ご飯のお櫃を背負って、防空頭巾を携えて見舞いに行った」

「はい」

「すると B29 が飛んできて、私は田んぼのなかに伏せるんよ」

「はい」

「上から見たら丸見えやったろうけどね。田舎やから、爆弾も落とさんと、そのままいってしまう」

「はい」

「そのころは私も少女やからね」

「はい」

「兄を見舞いながら、私は将来看護師になると思ったりもした」

「はい」

「兄が治ったら治ったで、ああ憎たらしい人やとか思って、ふふふ、看護師になろうと思わなくなっ」

「ふふ」

「そうやって暮らしてきたから、それは普通のこととは違いますわなあ」

空谷子しるす

(2021/07/04)

ある老師の話

その神父は箕面の田舎のおじいさんであって金勘定が好きだというのだ。

「そら楽しみなんてほかにあらへんやん」といいながらヒヒヒと笑うのだ。

とんでもない坊さんである。

彼が中宮寺の話をした。

「昔中宮寺に若い男が来たんよ。その男は日がな一日仏さんの前に座って動かかんかった」

ワインをのみながら箕面のオッチャンは語る。

「夕方になって小僧さんが門を閉めないとならんのにその男はまだおる。日が傾いていよいよ日没と言う時になってもまだおる。しかたなくもう時間で

すと言うと、男はようやく立ち上がって帰っていった。その翌日男は出征して戦地から帰ってこなかった」

神父は赤ワインを飲む。店の電灯がワインの面に映ってきらきらしている。

「僕もややこしいことや嫌なことがあったら中宮寺の仏さんのところに行くんよ」

私の出身は奈良であるから斑鳩はよく知っている。翌日私は法隆寺に向かった。

中宮寺は法隆寺のすぐ隣にあるから、法隆寺の前に車を停めれば歩いていける。法隆寺の拝観料は 1500 円と極めて高いからそれは入らずに、土堀と石畳の道の中宮寺までてくてく歩く。

中宮寺は尼寺である。

皇室の女性が出家するいわゆる門跡寺院であって、ちいさな寺は全体的に風雅な趣がある。中宮寺の拝観料は 600 円だ。常識的と言えよう。

本堂は山吹の花に囲まれた池に浮かんでいる。

その中に如意輪観音半跏思惟像がおわします。

蝉が鳴いているのは梅雨が明けたのであった。

池の傍で亀が甲羅干しをしている。

今日はよく晴れた。暑い中に風が吹き抜ける。奈良盆地特有の焦熱が心地よくて助かる。

漆黒の御仏は微妙な表情で衆生を救う手段を考えている。

人間一切が救われることは無いかもしれんが、考え祈ることは…

他人の痛みを取れずとも、我もまた悩み痛むならば…

斑鳩は晴れている。小宇宙のようなきれいな寺と汚くて埃っぽい地べたが混ざる。

野の花が咲いている。

私は腹が減ったから街に向かった。

空谷子しるす

(2021/07/11)

循環器

ある研修医は言った。

「気にしすぎなんだよ。『すみません』で流していけばいいじゃない」

またある研修医は言った。

「できるようになったことに目を向けた方が楽しいですよ」

循環器は6,7月の2か月だった。

指導医にひたすら金魚の糞をするという状態であって、カルテのことや採血、カテーテル治療のシース組みなどを教わった。教わったのであったが、物分りの悪い私は何度も同じしくじりをした。

私は相変わらず病棟に行って患者方の話を聞く。

驚くべきことに、この6,7月は「ふつうの心不全」や「ふつうの不整脈」は来ず、私が見たのは正体不明の重症肺炎、正体不明の全身疼痛と低ナトリウム、プロテインS欠乏症などであった。

私は無能感にかられる。

私はたしかに疲れている。

来月からの消化器内科はより大変らしいから、これは仕方ないことである。

空谷子しるす

(2021/07/31)

患者さんのことなど5

その人は指導医の外来に来ていた人であって、大動脈弁置換後にワルファリンを服用していたのであったが INR が伸びすぎたのであった。あと何故かよくわからない低ナトリウム血症があった。そして今回の入院原因は肺炎なのであった。

肺炎は抗菌薬によりただちに軽快した。

低ナトリウムも正体不明ながら持ち直した。

INR もだんだん調整できてきた。

しかしながら、この人は、4年前から全身が痛むらしいのだ。すでに膠原病内科にも受診済みだ。CEA と MMP-3 が高値である以外は全て陰性だ。上部内視鏡、下部内視鏡、全身 CT も異常はない。頭部 MRI でも脳炎のような所見はない。本人は全身が痛いというのが苦悶の表情はない。そもそも仮面様顔貌というのか、表情自体が乏しい。筋剛直もない。四肢に把握痛もない。Xp でも骨折はなさそうだ。かつて脊柱に圧迫骨折の歴があり、いくつか派手に潰れてはいるが、それは4年前よりもっと前の話だ。

病床を尋ねると決まったことを言う。

「しんどさはかわらないね。」

痛みに対して NSAIDs やトラムセツトを用いたが何の効果もなさそう。最終的に線維筋痛症も疑ってアメリカリウマチ学会の予備診断基準に従いスコアをつけた。合計で 33 点になり、診断基準は満たしそうであった。

サインバルタを用いたらすこし飯を食べるようになった。

飯の摂取は日に日によくなったが、本人は変わらないようだった。「かわらないね」を無表情で言うだけだ。「全身が痛い」

それでも飯を食うようになったのは嬉しく思ったものだ。そうは言っても治療方針を組み立てるのは私ではなく全て指導医な訳で、私はなにもしていないから、私がどうこう悩むのはどうでもよいことだった。しかしそれでも私なりにあれこれ考えて、苦しむ患者の前に行き、自らの無能にさいなまれていたのは事実であった。

私は阿保である。

悩まぬことを悩む一人相撲をして、くたびれ果ててロクに勉強もしない。

私は何をやっているのかと思いながら毎日病棟に向かう。

私より賢い研修医なら彼を救うかあるいは指導医とうまく連携できるのだと思う。

患者は退院していった。最終的に飯は 10 割食べていた。

そして数日後、CPA となって救急に運ばれてきて、そのまま逝ってしまった。救急隊は誤嚥で窒息したのが原因かと言った。車の中で残渣がかなり吸引できたらしい。しかし救急外来ではあまり引けなかった。自己心拍は戻ったが、翌日明朝また CPA になって逝った。

彼が運ばれてきたとき、私は半休を取って病院にいなかったから、翌日に彼の亡くなったのを知ったのであった。この病院は研修医を休日に呼び出すことは無い。

空谷子しるす

(2021/07/31)

一日

日野西光尊の「衆生ほんらい仏なり」を読んだり、関山慧玄禅師伝を読んだり、インターネットでゲーム実況動画を聞いたり、ある炎上した配信者を数年にわたり罵倒するスレッドを見たりしている。

苦しみとは日野西が言うように己の心が描き出すのみのものなのだろうか？
仏道にある人はしばしば、世の中のことはすべて自分の心が描き出したに過ぎず、無我になって暮らせばいきいきすると言うのだ。
さまざまな残忍な事件や病気や障害や迫害をうけて人は苦しむのだがそれらは自分の心の捉えようだと言うのだろうか。
幼稚園の時、私はオーストラリア人の神父が師であった。師は怒ったことは一度もない。真実やさしい人であった。
彼はなんらかの癌になり天理よろづ相談所病院にて帰天したのだったが、最後まで痛みにかかわらず微笑み病棟の患者や看護師に優しさを見せていたと言うのは病棟看護師の言葉だ。これは無我の人だったろうか。人が無我になるには神の御助けがなければ無理だと思う。
私は苦しいのである。腰が痛い。眠りが浅い。患者の管理がわからない。必死になって内視鏡を台に吊り下げる。医者になるには頭が悪すぎるように思う。
同期の研修医がたびたび研修の苦しみを訴える。私も苦しい。みなそれぞれに苦しい。
外に光が出てきた。雨は落ち着いてきたのだ。
私は神社に詣でようか考える。しかしこのあと、研修医と昼間から室の内で酒を飲む約束をしている。遠出はしがたい。
床の間に神社の御札を置いて神棚としている。毎日塩と水と米を上げる。手をあわすと心が落ち着くようだが、別に頭が急に良くなったり体の疲れや腰の痛みが取れるわけではない。伊勢の神宮を心に描き、拝殿の前に平伏して額着く想像を描く。「成る」と言われているような気がする。なんだか物事がうまく行く気がするが、苦しみは苦しみのままである。
無我になってひたすら人のために生きるとよいと日野西は言う。人のため人のためというと潰れはしないか。大学の救急の教授は自分が幸せでないと医療なんかできないと言っていた。
私自身が苦しいのに人の苦しみを聞くというのは救いが無い。いまは酒は飲まない。眠りたい。

空谷子しるす
(2021/08/15)

消化器内科

消化器内科といえば緊急にて食道静脈瘤破裂や憩室出血が来る科であるが当院はゆるやかであるから時間外に研修医が呼ばれることはない。

研修医のやることは内視鏡の設置、移乗介助、鎮静剤の静脈路確保、生検介助、ルゴール液散布やインジゴカルミン散布介助、雑務であり、しかれどもやるべきことが明確なのは私にはありがたかった。

病態はどれをとっても分かりきることはない。わからぬものをわからぬでは話が進まぬからガイドラインを覚えて治療方針を立てよと言われる。私は私なりに必死を尽くすが、私の能力は至らぬからやりきるを得ぬ。

私は患者の方々とよく話す。彼らは寂しいのかしらぬがよく話してくれる。当院の周囲がのどやかな土地柄であることもあろう。

患者方と話す。神社に行き祈る。くたびれて眠る。相変わらず女からは相手にされぬ。いままで一度も相手にされたことが無い。このまま一生独身かとも思う。鏡を見て、おのれの醜さを思う。また神社に行き祈る。私には祈ることしかできぬ。

学生実習で神経内科を回ったときにさまざまな神経難病を拝見したのである。若くして発症した場合、世間的に言う青春を諦めざるをえぬことが多くある。チャブレンのごとき活動をする浄土真宗の僧侶が話してくれたことがあった。「神経難病の若い男の子がね、お坊さん、あんたはいくら話しても僕の気持ちはわからないだろうと言うんですよ。だってお坊さんは学校も行って、仕事もして、結婚もしてんじゃない。僕はなんにもできないんだよ。お坊さんは僕の気持ちは絶対にわからないよ」

箕面の老師は言ったのである。

「司祭が一生独身なのは、いろんな都合で結婚できない人らの気持ちがわかるようにということもあるんちゃうかな」

私は神経難病患者のようにやむにやまれぬ事情もない。司祭のように自ら貞潔を誓ったのでもない。ただ女に厭われるのであって、それはある意味では最も惨めな立場なのかも知れぬ。

実用、実用の病院のことどもがうまくいかぬ。私は知能が足らず医者に向けておらぬと思う。しかし飯を食うためにやれる限りのことをやり、やりたくないことは極めてやりたくないと思う。

出町柳の柳月堂でケーキを食いコーヒを飲みながらこの文をものしている。背後で女子大生がよい男をひっかける算段をしている。

私は現代日本社会から結果的に疎外されている。
日蓮のごとく正しいがゆえに世が逆らうと思うべきか。
もはや努めて楽しいことを探し求める時期に来ている。

空谷子しるす

(2021/10/24)

産婦人科

当院はゆるやかゆえ、当直も希望制であり入らなくてもよい。

私はここ数か月当直に入っていない。

手技や知識、症例を貪欲に学ぶ同期達に気圧されたのもある。

救急が恐ろしくなったのもある。

とりあえず生きていければよいと思う。

私は無能である。

讃美歌にあるように、「世の友我らを捨て去る時も」神さんはこちらを見てくれているのなら、人間に背かれる苦痛にもなんとか耐えられる。

人生は一切皆苦である。自力でどうにもならぬ以上、私は祈り求めて与えられてきた。自力で獲得したものは何一つとして所持していない。

産婦人科で分娩を見ていると、この子達はむろん私より遥かに優れた資質があるだろうから、人生を遅く生き抜いていくのには違いないが、もし万が一私のように無能に苛まれることがあれば気の毒である。

分娩はほぼ必ず会陰が裂ける。

イヴが樂園追放の罪のために出産の苦しみを義務付けられたとあるが、たしかに出産は大変な出来事である。

日本神話にてイザナミは火の神カグツチを産む際に産道を焼かれて絶命したのであった。

出血する会陰を処理する医師の手元を見ながら、この赤い血が炎に擬せられたものかとも思える。

自力も、社会的つながりも、私のような愚かな人を救い得ぬゆえ、そうした外道のために神や仏の需要は尽きることはない。

論理的に神はいないと言えたとしても、聖書にあるように神の名は「私はある」という名であって、ただそのように思うより他は無い。

自力を恃める人は自力によって生きるのがよい。

神仏に祈らねばならぬ人は祈らねば到底生きてはいけぬ。
祈っても苦しみが止むことはない。
しかしわずかに生きることはできる。

空谷子しるす

(2021/11/09)

外科

外科のローテーションは基本的には急性胆嚢炎や鼠径ヘルニアの第一助手を務めることが目標になる。

言われたことを我なりに必死にやるしかないというのは、私にできる唯一のことである。

病棟管理は任されないから気楽なものである。外科の医師たちも破格に優しい。当院は恵まれていると思う。

日々は過ぎ去る。

大切なことは祈り以外に何もない。

空谷子しるす

(2021/12/31)

患者さんのことなど 6

その方はS状結腸癌の術後であった。

「若い頃は臨床検査技師やったんやけどね」

いまは認知症患者のケアマネージャーをしているらしい。

「認知症患者の人が、弄便て、便をいじらはるでしょう。あれは便器が手水に見えてはるんかなと思うんよ」

彼女の若い頃にはまだ廁の外には手水があった。

上からブリキの缶が吊るされていて水が入っていたり、水の入った陶器の器が置いてあったりしたのだ。その水を使って手を洗う。

「認知症患者の人たちもそういう年代やから、ぼっとな便所の世代やから、水の張ってあるところに便があると『手水に汚いものがある』と思うらしいんやね。それで掬って取り除かなあかんと思うんやと」

そんなものかなと思った。自分はブリキや陶器の手水はいまだ見たことがない。

「それで掬って、でも自分の手に汚いものがついているし、あわてて壁になすったり、どこかに隠したりするのよね。彼らも『なんとかしなあかん』と
思ってるのよ。理性はあるんよ」

彼らの時代の考えや文化を知らねば認知症を知ることは難しいという。

「それにしてもネ」

ふと懸念の色が彼女の額にかかる。

「切り取った私の腸の病理、どうなってるんかなあ」

彼女は元々臨床検査技師だったから、そういうことが気になると言った。

「私もむかしは標本作ったりしていたけど、40年も前の話やからね」

彼女は寂しそうに微笑んだ。

「まだ結果はさすがに出んよね」

断端から腫瘍の細胞が出るか出ないかは、たしかにまだ時間のかかるようだった。

「そうよねえ」

困ったように微笑む彼女は窓の外の田ンぼや団地を眺めるのである。

外は良い天気だ。

「そうそう、孫が音楽やっていてね、演奏を動画にして贈ってくれたんよ…」

空谷子しるす

(2021/12/31)

患者さんのことなど7

「僕は青森で工場長していたんよ。もともこのあたりの会社やったんけど
ね」

彼は下部内視鏡を受けるために入院し、その結果多量のポリープや癌らしき
組織を認めた方だった。

喉が詰まると言うので上部内視鏡も行ったのであった。その結果大きな潰瘍
性病変を認め、生検を行ったのであった。

それから全ての大腸ポリープを切除するため、引き続き入院となっていた。

「ちいさいころは満州でね。引き揚げて北海道に行ったけど身寄りがないので、
東京のおばのところに行ったんよ…」

それからこの地の工場に就職し、さらに青森の工場長を任されるに至ったら
しい。

「工場が長いからね」

と彼は言った。

「三交代勤務のしんどさはよくわかってるよ。看護師さんは大変や。僕らも夜間の故障があったら、朝が来ても直るまで帰れないからな…」

彼はたいへんな勉強家で、自らに行われた処置や投薬をことこまかに手帳に記録していた。

「若い時からのくせなんよ」

と彼は言った。

「一生勉強や。医者もそうやろ」

上部内視鏡の生検の結果、彼は進行食道癌であった。

主治医から病態の説明を受け、それから私がしばらくしてから彼の床に訪れた。

「食道癌…」

彼は泳ぐ目で宙を見た。

「問題は、どこが原発なのかということや。大腸か、食道か…」

彼はぼろぼろと泣いた。

「どこで手術を受けるのが良いのかな」

彼はいろいろ自ら調べた結果、他県の大学病院に手術を希望して行った。

空谷子しるす

(2021/12/31)

救急

救急の二か月が終わろうとしている。

ちかごろ余り眠れなくなった。

私は循環器内科医から侮蔑されているようだ。

他の研修医には優しい循環器内科医も私に対しては容赦ない。

私は自分が無能である意識をいよいよ確かめていく。

この二か月で分かったことは私は全く救急に向いていないということと、私は他の研修医よりも頭が悪いということだ。

人は得意なことで生きたほうがよい。

私はなにが得意なのだろうか。

以前診ていた患者さんがまた入院してきたので病棟まで会いにいった。

以前より弱った彼女は私のことを覚えていてくれた。

30分と短い時間を共有して私は病室から去ったが、「また来てくださいね」と彼女は言うのだ。

患者の人たちと話すのは私にとって一種のよろこびである。

しかし頭の悪い私は、ガイドラインやガンマ計算やさまざまな薬や指示のわからない私は、彼らを助ける術を持たない。

仲間である医療者たちの邪魔でしかない。

私はどうしたらいいかわからない。

空谷子しるす

(2022/01/27)

島行

本土からそんなに離れていないところに小さな島が浮かんでいて、そこに診療所があるけど週末医者がないから働き手を探していたのだったが、たまさか I 先生がそこに働きに行かれるとのことだったので私もついていくことにした。

島と言っても本土から 40 分くらいの船路である。

島は碎石で昔は潤っていたが、いまは寂れている。

港にはいくつも造船所のクレーンが生えている。

くたびれたドラム缶に火を焚いて、人が暖をとっている。

島には延喜式内の古社がましましていて、とてもよく祀られている。

島は幸いにして患者さんはほとんどこなかった。

私は一日、I 先生のこどもたちと遊んでくらしした。

彼らはなんでも面白がれる才能があった。磯辺から離れようとせず、みずたまりを木の枝でつつきまわしたりしてはしゃいでいた。もし磯だまりがあれば、なおさら彼らの心を弾ませたことだろう。

その島は、本土にちかいということもそうなのだが、どうにも島らしくなかった。

浜辺もなく、磯だまりもなく、漁船もあんまりなく、魚ではなく「のり」が特産品だった。

そして造船所のクレーンのむれが、さびついたサーカスの天幕張りみたいに、産業の鉄さびたにおいを撒き散らしている。

さび！この島はさびていた。海辺だからあちこちさびるのは仕方ないことだ。しかし時の流れや産業のうつりかわりが、この島をさびさせている。そしてそのさびをどうにも憎めないのだ。

私と I 先生はその晩「パラサイト 半地下の家族」をアマゾン・プライムで観た。

島で観たその映画は、映画としてとても極めて優れたものだった。そして島にとってもふさわしかった。

翌朝 I 先生たちと私は島を発つために港に出た。

島のこたかい丘に、まだ船には時間があるから登ることになった。

こどもたちは登ることそのものを楽しむことができる。

私は丘のうえから海を見た。

朝の日の光が海の上に反射してきらめいている。

ちいさな島のちいさな港が真下に見える。

本土の街から人を乗せに船がやってくる。

私たちも乗らなければならない。

島と私たちは、お互いの時間に戻っていく。

空谷子しるす
(2022/02/06)

島行

その島でパラサイトという映画をみた。

映画の中で父親は、計画を立てるから失敗するのだと、息子に教え諭した。

彼は決定論者ではないにしても、運命論者ではあった。

この島はかつて碎石で財をなし、バブル時には本土よりも地価が高騰していたという。

港は錆で覆われ、古びたビルが乱立していた。

この島をあの滑稽な父親がみれば、計画をたてるからこうなったのだとやはり言うだろうか。

その異様なビル群に惹かれ、家族で移住を決めた。

これから島を盛り上げ外国人も誘致するはずが、このコロナで頓挫した。

港でカフェを営む男はそう言って冷たく笑った。

再び計画は頓挫した。

今やこの島は、見せるという目的を欠いていた。

老婆が化粧を忘れるように、老いたこの島も化粧を忘れ、湿度の欠いた荒れた皮膚をそのままにしていた。

鉄錆に覆われるのは単にこのまちが老化したからだけではない。

この港には造船所が複数あり、古びた船がやってくることになっている。

しかし、それでも錆で覆われているこの港町の外観は、私のオリエンテーションを失わせるのに十分に異様な雰囲気をもっていた。

港には古い戦艦が夢破れて港に突き刺さっているように見えた。

港のまうらにある診療所の窓からは少なくともそのように見えた。

実際には造船所にドック入りしているだけのことであったのだが。

造船所にあるあまたのクレーンもまたもれなく錆び付いており、それらが群れた蟹の妖怪を思わせた。

我々は鉄錆を見ながら酒盛りをし、翌日は神社に詣で、また酒盛りをした。

港だけでなく、島全体に化粧気がなかった。

神社に化粧気が無いことはもちろんかえってよかった。

島民に色気が出てきたときにこのよき神社はどのように化粧で汚されるのだろうかとも案じられた。

子供たちにとって、化粧の有無は問題でないようだった。彼らにとって重要なことは、礼拝で鈴を何度も鳴らすことであり、海岸の石を物色することであり、よーいどんで誰が早いかを定めることであり、途中で暖かいミルクティーを買うことであった。O氏は、子供たちに参拝の仕方と神様について教えていた。

この島のあらゆるものが斜陽であった。

かつての繁華街には人気はなかった。

子供を遊ばせながら出会った老婆は、皆出て行ってしまって何も無いとこぼしていた。

唯一ある小さなスーパーでは、長屋の熊さんが先日亡くなったことを話題にしていた。レジ前では90歳代と思われる老婆がその死を知らなかったことに落胆し、繰り返し嘆いていた。

フェリーの駅には隣の島の求人があった。
碎石の求人で、日当は1.2万円とあった。
神社から見たその島は、スプーンでえぐられたプリンのように、削られていた。
その島の人口は500で、商店はひとつもなく、家が点在しているという。
彼らの世界はどのようなものであるのか。この島は半地下で、その島は地下なのか。

カフェの男も、港町の老婆もある種の具体性を欠いていた。
夜半にふと、彼らはあやかしの類ではなかったかと思われた。

患者を数名診た。
1人は70代の高齢者で、高血圧が心配と隣人を伴って受診した。
本人も隣人も独居だった。普段から支えあっているという。
1人は嘔吐を伴う頭痛の中年者だった。

島の診察は難しい。
本土に送るべきか、経過観察可能かどうかを検査に頼らず病歴と診察から判断しなければならない。
都会の救命センターであれば若年者ではなく、初発の頭痛であれば、帰宅させる前に頭部CTを撮影しておくだろう。
救命センターでは検査機器があるのに検査をせず疾患を見逃すということが許され難い。島では夕方に受診した場合、本土への最終フェリーには乗れたとして島に帰るフェリーは無い、本土に泊まる場所もない。
かくして救命センターの検査閾値は低くなり、島の診療所での検査閾値は非常に高くなる。
結局、心電図、簡易血糖に異常がないことを確認して観察することとしたが、祝日が終わるまでその患者の容態が変わりはしないか、ヤキモキした。

2日目の夜、やはり酒盛りをしながら、O氏とバラサイトをみた。
どのカットも並べれば写真展になりそうな美しい動画だった。
躍動感あふれるサスペンスに加えて、コメディの要素も多分にあった。
格差、学歴、計画、匂い
鑑賞後も象徴的なキーワードが頭に残った。

このコロナ禍に人々の移動は極端に制限されている。
私がこの島でアルバイトをするという計画は褒められたものではないだろう。
それがどのような島で、どのような診療所かということはまるで分からなかった。

賢い医者はそもそも選択しなかったろう。

しかし、私は選択、計画した。

給与目当てに？越境を試みた？進化を目指して？花が咲こうとした？

すると、島行の前日の PCR は陰性という結果となった（それ自体の感染を完全に否定するものではない）

前日に O 氏に声をかけたところ、即座に同行するという返事を得た（それ自体が感染を拡散させる可能性があった）

これが理性的な動物のふるまいと言えるだろうか。

私は花が咲く必然性は信じたとしても、運命は信じない。計画も立てる。

しかし、その計画はいつも粗雑である。

粗雑な余地を残していると強弁しておく。

必要十分条件が揃ったとみるや事態をうっちゃってしまう。

そのようにした方がよいと計画するのではなく、うっちゃってしまう。

性癖がそのようになっている。

この斜陽の島で、この日 O 氏とバラサイトをみるということは、そうでなければならない必然の力が働いていたように思えた。

私は計画を立てつつも、計画の外にある。

自力でありつつも、他力に委ねて朗らかに笑う。

かくして私は偶然性を我が物としていく。

私の祈りの形はこのようなものかもしれない。

ナルホイヤといっても差し支えないだろう。

(2021/02/07)

小児科

2月は小児科だった。

当院に産婦人科はなく、NICUはあるけれどそれほど忙しくない。

一日外来に張り付いて、ときどき診察や小児採血をやらせてもらった。

川崎病の子が来た。

よく泣く子であった。アンパンマンのドキンちゃんが好きで、ちいさなドキンちゃんの人形を「キンちゃん」と呼び離さない。

4日間の発熱があり、眼球結膜の充血、手足の硬性浮腫、体幹部の皮疹、莓舌（私は初めて莓舌というものを見た）と典型的な徴候を認めて川崎病と診断された。

ただちに彼は入院となった。

彼の母は彼をなでながら言った。

「○○ちゃんはいろんな目に合うなあ」

母親は彼を慈しみの目で見た。

「ぜんぶお母ちゃんが代わってやれたらええんやけどな」

幸い一回のIVIgで熱も下がり、血小板も大して増えなかった。冠動脈も拡張しなかった。

よく泣く子だったが元気になって帰っていった。しかしどうやらすっかり病院に懲りたようで、外来に来るたび泣いている。優しい子である。

兄がたまたま電話してきたのである。

電話の用件は彼の異動についてであった。その話が済むと、話題は私の仕事に及んだ。

「川崎病の子を診させてもらったんだよね。僕は指導医にくっついてただけだけど…」

と、私は川崎病の子を診て、幸い彼が元気になって帰っていったことを話した。

すると彼は妙に嘆息して言った。

「お前自分で気づいていないかもしれないけどな」

仕事で疲れた兄は急に身を乗り出したようだった。

「川崎病の話をしているとなんかいい感じだぞ。おかげで元気もらったわ」

私はよくわからないことを言われたので、そうか、それはよかったとのみ返した。

彼は妙に機嫌が良くなり、またなにかあったら話せよ、おれも話すからと言って電話を切った。

兄はときどき妙なことを言う男である。

勘にすぐれ、能楽を好む。

兄は私の言葉に何を感じたのかはわからない。
ただ、私は外来に張り付きながら、猫ひっかき病疑いや手足口病疑いやらの
の子たちを見ながら、
なんとなくこうしたことはたしかに意味のあることかもしれないと思った。
私はドン・ボスコ師の本を改めて読み返す気になった。
小児神経の先生が南方熊楠の熱心なファンであったことも私の気に入った。

空谷子しるす
(2022/03/07)

シタール

私の家にはシタールがあった。
父と母が新婚旅行にインドに行って買ってきたものだ。
それは土産物ほど安くはないが高級な楽器ということもないほどのもので、
誰が弾くわけでもなく放置されていたのであった。金属製の弦をはじくと、
清らかな水のように爽やかな音が出た。
シタールを聴くと肩こりが治るということの中島らもが書いていた。シタール
の奇妙な波長が私たちを癒すのだそうだが実際はよくわからない。
私の家のシタールは猫が本棚の上から落として壊れてしまった。母がどうい
うわけか引越しのあとに本棚の上におざわざ押し込めたのだ。シタールが嫌
いだったのか、というと、いや大切なものだと言う。私の母は良くも悪くも
女らしくなく、なさけというものに乏しい。母も小さいころから祖母の愛情
の足りなかった女性である。名古屋の中村の地主の家であったが、曾祖母は
早くに亡くなり祖母は義母に育てられた。試験の点は 100 点しか認められな
かった。女性としては最初期に大学生となったことが祖母の誇りだった。そ
んな祖母だったから、私の母に対して温かい母の優しさなどはなかった。
金があっても人は幸せにならぬものである。
しかし金がなければ幸せにすらなれぬ。私はシタールを買うことを考えた。
このところひどく肩が凝っていた。相変わらず私は異性の愛情という高級品
は得られずにいた。私は一種の不感症であり、人の優しさを感じられず、つ
ねに不安に脅かされている。だんだんと肩が重くなり、満足な人生を歩む同
期の研修医のなかで、私はまたいつものように僻めしくなってきた。
シタールはそのあたりでおいそれと売っていないらしいことが分かった。

十字屋はシタールを売っていないことがインターネットの検索から了解された。

民族楽器を扱う店が寺町にあり、そこに置いてあると分かったので私は向かうことにした。

車を走らせながら私は父と母のインド旅行を想った。仏跡を見て廻る旅は楽しかったのだろうか。もし私たちの身の上がつつがなく過ぎていたなら、私はどんな人間になっていただろうか。人生は一切皆苦という実感が私の中にある。父は幼い頃から育児放棄され、就職先をひきはがされ、実家の商売を追われ、奈良の旧市内にあらぬうわさをばら撒かれ、透析と心筋梗塞に苦しんだ。父もまた一切皆苦であった。父方の祖父も小さいころから船場の丁稚にされたから、また愛情のない男であった。そうした苦海の連続の先に私がいて、そうした苦海のことばかりしか考えられない。私があらゆる人から注がれている愛情に気がつけば私は救われるのであろうか。イエズスやマリアは私を愛してくれているのであろうか。私に情緒と感受性があれば私は助かるのであろうか。

私のくだらない運転は三条駅に着いた。

三条駅前にはほのかに暖かく、もう世の中は春なのだ。病院の中にいるうちに季節が分からなくなってしまった。たいした仕事もしていないのに、私は外のことがわからなくなっている。

寺町の楽器屋は明るかった。

男女の二人づれが音楽的なことを話しながら楽器を買っていく。

アジアが好きそうな女がアジア的な小楽器を買っていく。

私はまぬけなあほ面をさらしながらシタールを見ている。

「触ってみますか」とシヴァ神のように髪の高い男性店員が言ってくれた。

私は久しぶりにシタールを手を取った。なれない赤ん坊を抱くようにぎこちない私の手はシタールの首と丸胴を持ち、木の手触りが私に物質的な実感を与えた。

「シタールのピックはね、金属で指につけるのです」

と男性店員は言い、私は鳥のくちばしをふちどったような銀色の爪を指に挟めて、シタールの弦を弾いてみた。

あの日の音ではなかった。まだ家族が落ち着いて暮らしていたあの日の音では…

シタールは11万円ほどするらしかった。婚活だ何だと出費の多い月だったから私は購入をあきらめた。

私は部屋の中でシタールの音をインターネットで聴いている。肩こりが治る気はしないが気分は悪くない。

私がさまざまな、くだらない、つまらない思い込みや記憶や自らの歪んだ人格から逃れて、なにか意味のあるものを創り出せる日は来るのだろうか。それとももう過去のさまざまな事柄のために私の脳は萎縮してしまって、私は今生では祈りながら苦しみの無くなることを願いながら暮らすしかないのだろうか。それとも、もともとなにか意味のあることをする才能に欠けているだけだろうか。

能力がないなら無いで、享乐的に生きたいのに、私はそうしたことすらできない。

私はお金がもしずいぶん貯まったら、きれいなシタールを買うことを夢想している。

空谷子しるす

(2022/03/13)

脳神経外科

「ここの研修医は三年目が心配になる」

と脳神経外科の部長先生は言うのだ。

しかし私の兄は、

「おれの仕事も似たようなものだけどそんな言葉は嘘だと断言できる」

と言うのだ。

埋没縫合せよと言われ、してみたところ、無言で切断され、

「もっといっぱい救急でナートさせてもらいなさい」

と言われた。

しかし皮膚科で縫うと、「べつに二年目ならこんなものだろう」と言われた。当院は救急車が到着してから頭にカテーテルがつっこまれるまで二十五分くらいである。

とても早くて腕が立ち、そして脳神経外科医たちとしては破格に優しい。

しかし生の脳を見ることを期待した私は、あまりその機会が無いことを残念

に思った。

脳神経外科医たちは常に病院にいる。

「僕が初期研修医のときは、自分で希望して胆摘をひとりでやった」

と部長先生は言うのだ。

「もっと積極的にきなよ」

しかし未熟な私には、万全の力を身につけた上で積極的に前線に出よという要求に応えることはできなかった。

少なくとも私は脳神経外科医には向いていないことがはっきりわかったのでとても有意義であった。

同時に病院や医者考え方がますます嫌いになってきた。

空谷子しるす

(2022/04/20)

二年目

初期研修に入って一年経った。

なにかをやる時にそれほど恐れなくなっているのは、ある程度進む科を決めたからであろうか。私は確定ではないものの小児科に進もうかと考えている。小児科が一番居心地がよかったからだ。子どもらのために医療を行うことは少なくとも今の日本の環境では自然なことに思える…私には今の日本は誰も死や命について思いを巡らさないように思える。患者の家族が必ず生かせと詰め寄る。しかし患者はもう90歳近くで認知症も重く意思疎通ができないのだ。カルテには膨大な数のプロブレムが並んでいる。その全てをガイドラインに正しくのっとして治療することを指導医に言われる。しかし患者は家に帰りがあってせん妄を起こし、仕方がないことだが口腔も肛門周囲もいくら清拭しても汚れてしまう。

私たちがこの日本でおそらく考えるべきなのは高齢者の人々をいかに治療するかではなく、彼らといかに対話し、よく生きることを考えるかなのだ。

大阪で働く同期が言われた。

「おまえ、赤ひげ先生気取りかしらんけどな。自分の臨床力のないのを患者の機嫌取りでごまかしてへんか。赤ひげとか寄り添うとか言えるのは治せる疾患を治せて、治せない疾患を緩和できるようになってからの話や。おまえは間違ってる。おまえは医者に向いてない。辞めろ」

おお、正論。あらゆる正論を私は憎む。

人の世の正論ほど致命的な誤謬は存在しない。

だんだんと割り切ってくる。救急の現場は最終鑑別をつける場ではない。自分の時間が過ぎるまで生かせばよい。それは有用な考え方だ。しかし素早く捌く中で副産物が精神の中に生まれる。長っちりの患者を疎み始める。暴飲暴食で体調を崩した患者を疎み始める。糖尿病、精神疾患、認知症、救急現場を阻害する諸問題を冷めた目で見ようになる。それは私の力が足りないからだ。私の父が糖尿病患者だったのに、糖尿病患者を疎む医療者の感情を私は理解できるようになっている。

この一年で何かしらできることが増えたことは嬉しいことだ。しかし同時に失ったこともある。その矛盾を私は忘れてはいけないと思う。矛盾を矛盾のまま保持するためには、私には祈りが必要なのだ。

難しいことを単純にするのももしかしたら祈りによって可能になるかもしれない。

空谷子しるす

(2022/04/23)

患者さんのことなど 8

「この気持ちはなってみないとわかりません」

と彼女は言うのだ。

「さびしい気持ちですか？」

彼女は遠くの山を見ながら言った。

「そうとも言えん」

彼女は89歳で拡張型心筋症にICDが埋め込まれている人だ。もともとB型肝炎もあり、今回は著明な腹水貯留で入院した。

彼女はもう自宅に帰れそうになかった。

「早く死にたい」と彼女は言うのだ。

「最近、よく実家と弟の家とが思い浮かぶ。自分の家はまったく出てこない」
それだけ実家や弟さんが馴染み深かったのかと聞くと、「そうかもしれない」と言う。

彼女の病室から低い山が見える。

その山は弥生時代の遺跡や古墳があり、山頂に荒神様を祀っている。その山

に彼女の実家の歴代の墓がある。

「息子はよくやってくれてる…」

彼女は弱い声で息子を誉めた。

彼女が息子を誉めるのは私は初めて聞いた。

「珍しいですね」と言うと「そうやな」と言って笑う。

「早く死にたい」とまた言うのだ。

そのたびに私は「人の命は人は決められんですからね」と言う。

「そうやなあ」と彼女はうなずいてくれる。

伊勢の大神様や多賀の大神様がいいようにしてくれますよ、とも言う。いつも祈っています。だからあなたも僕のために祈ってください。彼女はそれらの神様への崇敬がある。彼女は私の独身を心配してくれている。

「ありがとう」と彼女は言う。「先生のこと祈ってます」

彼女はものが食べられなくなり、せん妄を起こすようになって亡くなっていた。

彼女がのぞましい死を得られたかだけが気がかりである。

私は自由になりたくなった。

空谷子しるす

(2022/04/28)

患者さんのことなど9

当直中に病棟から電話があった。患者さんが亡くなったので死亡診断してくださいと言うのだ。死亡診断書は主治医の先生が書いていてくれて、日付と署名だけでいいです。

救急が落ち着いてから行くと、ご家族と患者さんと看護師の方々がいた。

おおこだこだど私が言うにご遺族はこっちです先生、と言って微笑んだ。

はじめてお会いした彼は亡くなった人特有の黄色い皮膚をしている。痩せており、頭蓋骨のかたちそのままの顔をしておられる。

私は死亡診断をし、たまたま手持ちの時計がなかったので看護師さんの時計から死亡時刻を告げた。

コロナの感染防御をしたまま、私は地下に随伴して患者さんを見送った。

私はまた救急に戻った。

私はいまだに彼がどんな人であったかを知らない。

空谷子しるす
(2022/04/28)

皮膚科

ツァンク試験、尋常性天疱瘡、皮膚生検、ポーエン病の手術、Stevens Johnson、KOHの検鏡がたくさんと様々なことが起こり、一か月は流れていった。

皮膚科は必ずしも楽しくはない。しかしこれならもしかしたら自分にもやれるかもしれないとも思う。

四月から月二回義務の一人当直が始まった。

私はなんとか二回を乗り越えた…指導医の消化器内科医は「よく一年でここまで育った」と裏で私のことを誉めてくれていたらしい。

とても嬉しいことだ！知らないことは知らないと開き直り、臆病さと共に進んでいく…

大学の皮膚科には知り合いが多い。

皮膚科もありだな！と軽薄な私は考える。

ともあれ私は寝たい。素敵なお人と結婚したい。楽しいことを探したい。

私は何が楽しいのか？

空谷子しるす
(2022/04/28)

熊楠

白浜の南方熊楠記念館に行ったのである。

完全に無計画であった。

私は歩いて駅まで行き、電車に乗り、白浜を目指した。

南方熊楠記念館は番所山という岬の先端にある。

南方熊楠の直筆の書写やイラスト、Natureに掲載された論文、標本、粘菌の数々が展示されている。彼の生涯Natureに掲載された論文は51篇に及ぶ。

彼はさまざまな本を書き写すことで覚えた。

8歳のころから和漢三才図会を本屋で見ても自宅に紙に書き出したのは有名な話である。

東大予備門を辞め、渡米し、さらに渡英するなかで様々な書籍を書き写し、覚え、野山に出て標本採集し続けた。

イギリスから帰郷した後は那智や熊野の山でほぼ全裸で粘菌の採取をした。

彼の興味関心は人間を含めた自然全体に及んでいたのだろう。

彼は実体を眺める方が好きで、机の学問は苦手であった。幼少のころから山に入り仲間からは天狗と呼ばれた。学業成績はほぼ全ての科目で極めて悪かった。東大にしても代数や体育が嫌で、標本採集と図書館ばかり行くので出席もせず、代数で落第したため辞めたのであった。

エコロジーという言葉を最初期に用いた日本人でもある。人間を含めたあらゆる生物が、どれを欠いても自然は成り立たぬと言うのだ。したがって明治政府の行なった神社合祀には烈火のように反対した。鎮守の森を伐採することで貴重な生物たちが失われる。神々を損ない、侮辱する。人々が神々と紡いだ物語や歴史が消える。鎮守の森の材木で儲けることを考えていた外道の小人に対して彼は激烈に怒ったのだ。

彼はさまざまな知識を知る以上に、それらを「有機的につないで」新しい結論を導くことができた。しかもその結論に卑しい名利の気持ちや他者を蹴落とさんとする戦闘心が無く、天下万人の為は言うに及ばず、もちろん己の為であり、近所の飲み友達や、小さいこども、馴染みの芸妓、遠方の知己、身寄りのない弱った人々の為であった。アメリカ時代の友人、孫文もその一人である。あちこち飲み歩いては猥談をし、銭湯で人々に世界中の面白い話をして、また人々から民話や生活の話面白く聞いた。下ねたも天空の星々も宇宙の実在であることを彼はよく知っていた。彼は真の天才の一人である。それは空海の描いたホロニックな世界と似る。熊野の神々の大きな世界に通う。

番所山から見た太平洋はどうだ！南紀の亜熱帯性の植生、照葉樹林、温順な気候の中に私は立ち。眼下に広がる太平洋は限りなく美しいのだ。

ああ私たちは何をすべきだろうか。自然の探究をすべきだ。しかし物質的で名利的で戦闘的で打算的で澄ました論理による研究というもの。そうした研究をすべきだろうか。違う。「研究者」たちには知能はあっても軸が無い。南方熊楠の中に建立された無前提の精神の「軸」がない。同じ自然の探究でも南方熊楠のような情熱と精神の「軸」があれば、知能が高いだけの冷血漢たちの中でも生き延び、導かれる。本当の意味での自然の探究となる。

南方熊楠は私たちの先達としてふさわしい。

見よ。熊野の杜は彼を産んだのだ。

追記 彼の死後解剖されて取り出された脳髄は決して大阪大学ではなく 日

本国内なら少なくとも京都大学か東京大学に収められるべきだろう

空谷子しるす

(2022/05/01)

S先生

S先生が関東から来るから飲まないかとI先生が誘ってくださった。

S先生は小児科医である。しかし消化器内科専門医でもある。

重症心身障害児の成人内科への移行が円滑にいかないことがある。成人内科は先天性疾患がわからない。小児科医は成人疾患がわからない。はざまにある重症心身障害児の人々は、しばしば誰が診るのが問題となる。それでS先生は小児科専門医を取得した後消化器内科専門医となろうと思った。重症心身障害児の成人疾患を自分で治せるようになるためだ。内視鏡技術を獲得し、自分で重症心身障害児に内視鏡治療を行えるようになるためだ。それですぐに彼は雰囲気よさそうな某病院の門を叩きに行った。給料はいらぬから消化器内科の修行をさせてくれと言った（実際は給料は出たらしい）。彼は患児に「お前」と言う。患児の親にも「お前」と言う。腹が痛くて学校に行けぬと親が言う。患児の愁訴を親が言う。彼は患児をまっすぐ見て、「で、お前は どうしたいの」と言う。「学校にいきたくない」と言ったりする。「おう、それでいいよ」と言う。彼は患児にしろ、研修医にしろ、考えて行ったことは認める。考えなしの行動は認めない。「腹が痛くて学校いけなくってもいいよ。どうしても本気でやばくなったときは、おれが胃カメラして診てやるから」と言う。内視鏡技術があることで、患児もいざというときは治してもらえると安心して安心する。「こどももバカじゃないからさ。でまかせは通じないよ」とS先生は言う。

S先生はいいかげんな処方や指示を嫌う。漫然と3号液が繋がれているのを嫌う。死亡診断書を「作っておきました」と軽々しく言うのを嫌う。死は特別な瞬間である。なぜ診に来ないのか。病棟で彼は亡くなった患者ならびにその家族と向き合った。その患者は彼の担当でない。担当医は来ない。担当医が事前に「作っておいた」死亡診断書があるだけだ。彼は「作っておいた」診断書を破り捨てて一から作った（いまは事前に死亡診断書を作っておく習慣に一定の理解を示している）。

彼は後輩に金を出させない。かならず奢る。良い加減な指示や処方方は蹴散ら

すので、彼の指示を仰ぐために若手が彼の周りに並ぶ。パワハラをしていると彼は言う。しかし逃げ道は残しているから、訴えられたり潰れたりはしないと言う。

彼は小児科医として、総合診療医的性格を有する小児科医として、医療への思いを語る。しかしあくまで「ひとつの意見として聞いてくれ」と必ず言う。彼は朝誰よりも早く、誰よりも遅い。彼は力にあふれ女性にもてる。貧しい境遇に育った。乗用車に住み、そこから学校に通ったこともある。母子家庭に育った少年である。異様に頭が良く、小学1年次で二次関数を解した。まずベッドサイドに行けと彼は言う。それで余計な処方箋がひとつ減るから。とにかくベッドサイドに行けと。研修医はいちばんそれができるしそれでよいと。患者に寄り添うというのは当たり前のことだ。その上で専門家として「指針」を示すのが医者だと。この指針というのは医学的な選択肢を並べ立てることではない。彼は専門家として進むべき道を示すのだ。もちろん相手の意思を鑑みながら、しかも彼は苦しむ人間に道を示すのだ。

「そういう意味では宗教みたいなもんだよ。S 教の教祖だよ」と S 先生は言う。知識や技術のうらづけはあっても、最終的には「おれを信じろ」ということになるからだ。ことばで人を安心させて導く。しかしことばで導くからこそ、まちがいは起こりうる。だからいつでも全責任を S 先生は背負うつもりでいる。

私は、そうすると医者は落語家のようなですねと言った。医学知識は古典落語の知識である。古典の知識を知らなければまともに話すことができない。その上で落語家は芸に人間が出る。まじめな人間はまじめな芸になる。人を見下した人間は人を見下した芸になる。芸はごまかせない。医者も同じようですね。診療に人間が出る。たしかな知識をもとにして、その上で話芸で人をよくしていく。

S 先生は「よくおれの話聞いてる」と仰った。

S 先生は酒をたくさん飲む。S 先生が指導医であったら、とても怖かろうと思った。

空谷子しるす

(2022/05/16)

さつき

寮の二階に住む一年目の研修医が彼氏を連れ込んだようだ。床の薄いのを知っているから音をひそめているようだが、そのこそこそいうのがかえってこちらの気が引けるから部屋を出た。

今日は三年目の整形外科の先生と会うのだ。彼は初期研修医のころ、指導医からさんざんな言われようだったようだ。人間的にも彼を嫌う人は少なくなかった。いわゆる「だめレジ」扱いだったのかもしれない。いいところも悪いところもある。明日になったら私も彼のことが嫌いになったり、尊敬したりするかもしれない。先のことはわからない。

週末は当直だった。

今日は明けの明けにあたる。体が重い。

「体力のないやつや知力のないやつは医者じゃないヨ」というような雰囲気をもとった人たちは嫌いである。ちいさいころからスポーツも得意で勉強もそこそこできて、生活の不安もない、異性にもそれなりにもてる人間が苦手である。

レキシの名盤「V キシ」を聴きながらびわこ線は京都に向かう。近江八幡の麦畑は収穫しつつある。刈り取った後は野焼きをする！近江の山々が青く色づいている。

ふと親父のことを考える。

親父は仏典はなんでも読んで、禅なども組み、インド旅行の際は日本の坊さんたちが経が読めんので代わりに読んだ。密教の行に通じ、金剛不動明王経というのかしらないけど、不動明王の護摩なんかはよく夜中やっていたのだ。火は焚かない。商売が不安だから真言を唱えた。

でもなあ、禅や真言じゃ幸せになれないんだよ！護摩をあげて、自力をつくして神仏を動かそうとするほど親父は殺伐とした。殺伐としたおやじが家の中で暴れたのなんて星の数ほどある。だから兄貴は家を飛び出した。商売も金が入っても親族は乱痴気になって濫費した。親父は糖尿病腎症と心筋梗塞で60でみまかったんだから、彼の人生に意味がないわけではなかったけれど、仏教的な面が彼の魂に安らぎを与えはしなかった。僕は数センチ先の間近でそれを全部見ていたのだからな。

いいか、仏教じゃなんにも救われぬ、すくなくとも原始仏典の素朴な正解以外は何の意味もないんだ、それだってただ当たり前のことを言うだけで、今苦しんでる「病人」にはなんの役にも立ちはしないのだ。病人には常識や理屈より「薬」がいるのだ。あたまの良さなんて糞だよ。

私は親父の 60 年の人生から仏教はだいたい無駄であることを学んだ。そのうえで、私は仏典を読んだり仏様に手を合わせることをしている。祈り以上に意味のあることは無い。だから仏典も読むし仏様に手を合わせる。

でも世の中には禅に救われる人がいる。

箕面の神父が前に言っていた。道は人それぞれだ。オメガ点って、終着点はひとつだから、気に入ったやり方をしていけばいいのだ。みんな勝手にしたらよいいのだ。僕をバカにしてもいい。自分がエライと思っていい。僕だって人を見下したり自分をもののがわかったやつだと自惚れているから。矛盾まみれだ！僕もイヤなやつ、みんなイヤなやつで、みんなイイヤつなんだ。だから僕は矛盾があるから祈るしかない…

電車は京都に向かって走り続けるから本当にいいものだ。ごちゃごちゃ考えていたって動いてくれるから。僕の考えはいつも同じところを巡っている。これが前に進むときが来てほしい気もする。素敵な彼女ができれば進むかもしれない！もちろんそんなことはないことは知っている。

くだらなくない人間になりたい。「くだる」人間になりたい。おれは何のために生きているのだろう。おれのことを褒めたり、認めてくれる人がいる。うれしいけど理由がわからない。おれのことを嫌ったり、バカにしたりする人が大勢いる。理由はわかるし、納得するけど、腹がたってしかたない。妻もいない。子どももいない。うまいものを食べても、酒をのんでもいつきのことである。そのいつきをちゃんと楽しめたらこんなに空しくないのか。人生が楽しいって、たとえば良寛さんや白隠禅師は生きてて楽しかったのかな。いま生きていたら、有給とって会いに行きたかったよ。新幹線に乗ってな。

世間虚仮、唯仏是真というのは正しい。祈りと善以外に価値のあることなどない。

さつきがまだ咲いてるから五月だなあと思う。五月の光は明るいよ。みんな幸せでいてほしい。僕も含めて。これは本心だ。

空谷子しるす

(2022/05/29)

研修医・レジデントの先生のエピソードを随時募集しております。応募は下記のメールアドレスまでお願いいたします。rinshoubungeiigakukai@gmail.com